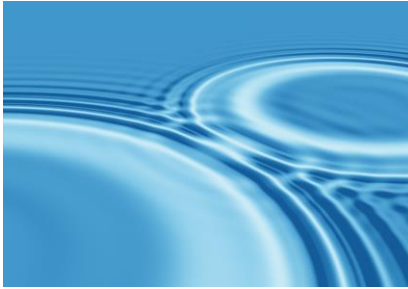


水<sup>み</sup>

際<sup>ぎわ</sup>



## 有森信二

澄み渡った空に、白い機体が上っていく。左翼を少し傾け、高みへ高みへと進む。

過ぎてみれば、五日間の休暇など瞬く間のことだった。理乃が機内に姿を消したとき、祐介はこれでまたしばらく共に暮らすことはないのだと思った。理乃を乗せた便は、ほぼ定刻に離陸した。

機体は上空のはるかに上り詰めると、やがて太陽の光に包み込まれ、そのまま視界の外に消えていった。

祐介は駐車場に戻ると、運転席に腰を沈めた。理乃の香りが濃く残っている。一時間前、頬にキスをして車を降りたときのままで。「頑張るよ。祐介もあまり無茶しないで」といい、理乃はコートの胸をつくろうと、愛用のサングラスをかけ、表情を引き締めた。

理乃は、これから追い込みに入るという。

好成績を収めてきた溪流社の、天然の水に限りなく近い水を生む自然回源浄水器の売り込み強化のため、理乃を中心としたチームの考案になる化粧品類の販路拡大の方も併せ、週明けから本格的な取り組みを始めるということになっている。溪流社の浄水器が生む回源水のすばらしさを知らせるための展示説明と、回源水の粒子の優れた浸透効果に着目し、スキンケア商品、ボディケア商品などにもさらに工夫を加え、次の局面に入るのだという。

三年次の秋に学生結婚をした理乃は、就職はせず、毎日祐介の帰りを待つだけの生活を送っていたのだが、デパートの

特別販売で出会った自然回流水に興味を抱き、祐介の了解もなしに、五十万円という高額の浄水器を購入したのだった。自然回流水浄水器と名付けられたそれは、水道の蛇口横に据えられ、蛇口を捻ると水道水が浄水されるという仕組みのもので祐介が口にする、なんとなく違うのである。

「まろやかな味だな」

「コーヒーの味がずい分変わったと思わない」

「銘柄が少し上質になったのかと思つたよ」

「でしょう。銘柄は変わらないけど、水が変わつたのよ」

理乃は得意気だった。

「五年間、専業主婦をやつてたわ。子供でもできれば別だつたんだけど、部屋とマーケットとの往復ばかりでは、たまたまなくて。毎晩十一時を過ぎないと、祐介は帰らない。私いつたい何やつてるんだろう、このままだと、足元から錆び付いてしまいそうつて。で、たまたま出会つた自然回流水普及の講演会に出てみるうち、会社の執行部の人の目に止まつてね。何度か会で一緒するうち、私の仕事はこれなのかもしれないと思つたの」

理乃の目が光つていた。身に着けるものもこれまでとは違い、どこことなく華やいでいる。

大学二年の、サークル合同の合宿コンパの世話役に当たつた二人は、一週間という短い期間に毎日ミーティングの機会を得て、不思議に感じ合うものがあつた。その後互いの家を訪ね合い、周囲の勧めもあり、卒業を待たず三年次の秋には

婚姻届を出したのだった。

学生時代は、下町のレストランで食事をし、ビールで軽く酔い、頻繁に肌を合わせてきた。卒業するまではと子供は我慢することにしたが、四年次の夏に一度中絶したことがある。だから二人とも、望めばいつでもできると思つていたのでた。

が、祐介が大手の不動産販売会社に就職が決まつてからというものが、九時には会社に出勤し、夕方六時、七時まで現場を回り、帰社して案件の処理をしていると、どうしても家に帰り着くのは十一時を回ることになった。理乃が温めてくれる食事をとり、缶ビールの一本も飲むと、シャワーを浴びる間もそこそこに眠りに落ちた。入社一年を過ぎる頃には、理乃の肌に触れる間が一月以上も空くことさえ、珍しくなくなつていた。

「太古の森の奥深くに流れる天然の水。天然が持つパワー。その天然の水に限りなく近い水を家庭でも得ることができたらというのが溪流社の目標であり、京浜理工大学との合同研究の末、十年をかけて真正品ともいべき浄水器が誕生したのよ。その浄水器が生んだ水がこれ。私も、最初はよくありがちな誇大広告の類かと距離を置いて見ていた。でも、妙に気になるので、お魚をしばらく水に浸す。お米を水で研ぐ。台所回りを水だけで拭く。など、溪流社がパンフレットに書いてあることの全部を試してみたの。すると、お魚はまるで生き返つたみたい、ご飯はおいしい。台所のしつこい汚れは簡単に綺麗になる。いえ、何度も疑いながら試してみたのよ。

お茶の味、コーヒーの味がまるやかになり、たくさんの水を飲むのが苦手だった私が、コップ二杯を一気に飲むことができ。極め付けは、回源水に浸したお肉から、なんとも気持ちの悪い赤黒い添加物かと思われるものが、ボール一杯に溶け出したこと」

「僕、だって、理乃が何かを追い詰めるときの勢いらしいものを感じていた。確かにね、酔い覚めの一杯の水が旨い」

「祐介には詳しいことを話すまでに、本気でこれを試したかったの。そうするうち、疑問が一枚一枚剥がれ、確信に変わっていった」

「流れはよくわかる。理乃らしい話の詰め方だ。で、何か妙案でもあるのかな」

こんなとき、理乃は決まって次の手を思い付くのだ。ペツドを買い替えるとき、壁紙の色を替えたいとき、イタリア旅行に出かけたいとき、果ては下着のかたちを変えたいときなどまで、祐介に提案する。囚われることを望まず、家計のこととは全て理乃が采配しているにも拘わらず、相談する。内容はどれも祐介が反対などすることもないので、結局そのまま理乃の思いどおりになるのだが。

「かまわないでしょう」

理乃はそう切り出す。二年前、腰の具合がよくないので、評判の整体に行きたいといったときは、祐介も多少考えないではなかった。聞いたところでは、都心の地下にある整体は、女性が引きも切らず通うという店で、夫婦生活の問題の相談にもものつてくれるというのだった。

祐介も自分の日頃の努力不足が理乃にそういわせるのだろうという負い目もあり、「結構だよ」と鸚鵡返しに答えたのだった。理乃が適宜なマッサージを受けることで、心身の調子がよくなることであれば、何を押しとどめるという理屈もないのだった。

「どうかしら」

理乃は溪流社の非正規社員として、雇用してもらうことの提案をしている。雇用されれば講師と呼ばれ、十時から十八時の勤務となり、自分の顧客や、広告で集まった客に対し、回源水浄水器についての講演会の場で、回源水の効果の実際の説明を行い、さらに回源水を用いたスキンケア商品、ボディケア商品などの販売に当たるといったものであった。

回源水浄水器の販売は、講師である担当者が新たな客を紹介するという商法を基本として用いており、売り上げがあれば自身が紹介した分の定率が支払われるという仕組みであるといい、講師の工夫努力により新たな紹介客が次々と現れるのだった。

祐介も一度理乃に誘われ、講演会に出席したことがあった。三百人ほどのホールには婦人たちの姿が溢れ、十人には満たない講師が舞台の袖に腰を下ろし、リラクゼーションのための環境音楽が流れる中、微笑みながら待つという次第で始まった。

すると、司会者の一段高いトーンのアレクシオンに合わせ、まだ三十台半ばであるのだから代表者が舞台に颯爽と登場し、

会場の空気が整うのを見計らって穏やかに口を開いた。最初に、現在の環境汚染の問題から説き起こし、「この病んだ時代である今、自分たちの知恵で健康を守り、家庭を守っていかねばならない。そうすることで、心と体のバランスを適正に保ち、与えられた美を維持し、豊かな生活を満喫していただく」という趣旨を述べ、徐々に会場が高揚していくのだった。代表者は会場の空気を穏やかな笑顔で受け、「そのことのために、天然の水に限りなく近い自然回源水を得る技術を開発した。回源水の効果は、パンフレットに触れているとおりであるが、特に肝要な部分を例を用いて説明したい」とし、趣向の凝らされた動画となった。

最後は「今説明した内容は回源水の示す可能性のほんの一部の例示に過ぎず、これからも講師らスタッフや参会の皆さんのアイデアや要望を取り入れ、さらに飛躍させていきたい」と軽やかな口調で締めくくると、満面の笑顔をいま一度会場に送り、壇上から去った。

終わったときの会場の空気は、例えていえば全員が催眠術にかけられた、とてもいわんばかりの上気した表情で、代表者が退場した後、ややあつて参会者全員の盛大な拍手が舞台に向けて送られたのだった。

理乃は今ほ祐介の傍にいたが、祐介の承諾が得られれば、舞台袖の講師の列に連なるのだと知れた。もつとも、祐介の承諾があるうとなかろうと、理乃の性分なら時を置かず列に加わるに違いない。

必ずステップを踏まずにはいられない理乃の手順として、

会の雰囲気は祐介に味合わせるために誘ったのだろうし、祐介の仕事に障りのないまっとうな仕事であり、団体であることを知らせようということなのだろう。

上気した参会者たちが、舞台袖に駆け寄り、それぞれの講師の元を集っている。十人ほどが、座席の理乃にも挨拶にやってくる。

「本当に説明を受けていたとおりのすばらしいお水ですね。あれこれを疑いながら試してみたいです」

「太古の水に近いというところに感激しました。最近の水道水、良くなってきたとはいえ、このまま飲むのは躊躇われません。で、サンプルのお水を試してみても、もう引き返さない。回源浄水器にしよう、との決心ができました」

「いつもお水は、ベッドボトルで買い求めていたんです。身近にこの浄水器があれば、本当に安心です」

頬を膨らませた婦人たちが、理乃の肩に、腕に擦り寄る。閉じられた会場に、どこから押し上げてくる風が舞っているのではないかと思える。講演が終わると同時に、いったん絞られていた照明がアップされたく、空気が軽くなった。バックの環境音楽もポリウムが上げられ、婦人たちの高揚した声を越え、押し上げる風とともに流れる。

「よく遠方からお出でいただきましたね」

理乃が、三十代と思われる化粧の派手な婦人に向き合っている。「関西からですか、まあたいへん」とねぎらう。

「懇切なメールをいただき、ホームページを何度も拝見させていただいたの。それでも、やはり皆さんの生の声が聞きた

くて。ええ、聞くというより感じたくて」

「いかがでしたかしら」

「いただいたメールの中身のことが、希望から確信に変わりました。太古の自然水という謳い文句、ちよつとオーバーではないかしらなどと、内心思っていたんです。先に、展示のパネルや、浄水器や、自身での操作体験をさせていたいただいて、もうその時点で納得しました。そのすぐ後の、講演会でしよう。回源水が何故求められ、どのように作られたか、何をめざしているかが身体中に染みだ感じです」

「ありがとうございます。自然に還るというアイディアのもとに、どういう工夫がなされて実際の製品がなったかというくだりですね、私も何度も聞くのですが、いつも納得します。私たちの身体をつくる細胞は、太古の自然のものと触れ合うことで癒やされる、と心から思えるのですよ。現代の先進技術と、太古の穢れのない水や空気との触れ合い、このコラボレーションですね」

「人間文明の進化、利便性を追い求める間に、知らず知らずに取り入れてしまった必要悪の数々。それらから逃れるというより、太古の自然が持つ力によって清らかにするという趣旨ですね。細胞の芯から清らかにするという」

「よくそこまで捉えていただけでしたね。とてもシンブルなことですが、時間はさかのばれないけれど、自然に還りたい。もちろん、現代の文化の恩恵も被りたいという、本当に欲張りなことはありますが、まず回源水というもの一つを利用して、大きい問題の一つ一つが解きほぐされよ

うとするのですから」

理乃は上気したままの表情で、五人に、六人に対応する。回源浄水器を購入する際は右奥のコーナーへ、新しい開発化粧品は左のコーナーへなどと、手際よく案内する。

祐介は、これほど引き締まった理乃の表情を見るのは何年ぶりだろうと思つた。講演会での代表者の説明が巧みであったことは認めざるを得ないが、理乃の方もトーンが上がっているのだつた。

祐介は待合室のソファーで小一時間を過ごしながら、理乃が会場からなかなか出てくる気配がないのを気長に待つた。目を見開き、酔つたような表情の十人ほどの婦人たちに囲まれ、理乃自身も酔っているに違いないと思つた。理乃はこの熱気に身を火照らせ、「日常のたまらない生活」から少しは離れ、あるいは祐介からは得られることのない大きな刺激などを、堪能しているのだろうと思つた。

理乃は間を置かず会の講師の若手メンバーとして加わり、会が主宰する講演会の準備に、本番にと出ることになり、家を空けることが多くなつた。回源浄水器のことで問い合わせがきたり、浄水や化粧品のことで相談を受けたりすれば常設展示場などに出かけ、化粧品の開発企画会議とやらで頻繁に外出した。

講師になる前も週に一日ほどは出かけていた模様であるが、正式に講師になつてからは、祐介の方が先に帰宅することも多くなつた。ときどきは、研修会と称し、五日、十日と家を

空けた。会合がない日は馴染みの整体に出かけ、オイルマツサージとやらを受けるのだといった。講師としての収入は、新人の講師にして、早くも上位に名を連ねることになったらしい。

殆どの力を回源水に捧げるというほどの働きぶりから、祐介の給与を当てにする必要がない程度の収入を得ているらしく、たまには会の若手の男性職員を食事に誘ったりするのだとも聞いた。祐介も「ほどよい程度にね」と、軽く釘を刺すジョークのつもりだったが、「ひよつとして、私、できない身体になったのかも知れないわ。きちんと調べてみないとわからないけど」と含みのありそうなことを返してきた。

「多分、浜通りのあの小さな産科で中絶したとき、処置が悪かったのかもしれない」

というので、久しぶりに理乃を求めてみたが、「疲れているから」と背を向けられてしまった。浜通りの産科というのは、二人が学生の身であったので、当時住んでいたアパートに近い、あまり患者の入っているところを見たことのないクリニックで済まされたのだった。医師はもうクリニックを閉めようかと噂をされるほどの歳で、込み入ったことなど聞かずに処置をしてくれた。祐介はアルバイトで溜めていた貯金の全てをはたいて、支払いを済ませたことを覚えている。

祐介は会社の定期異動で福岡支社に出向となり、学生時代を含めて十年以上住んだ東京を離れた。昨年の四月のことである。

「私は当分回源水の普及に努めなければならぬ仕事があるから、ついていけないの」

と理乃はいった。珍しく十時前に会社を出、久しぶりで食事と共にしたのだった。すつかり健康志向の和食党に変貌した理乃は、老舗として知られている菊水という店にタクシーを着けた。理乃は常連客の一人であるらしく、女将が直接部屋に出向いて挨拶をしていた。

「僕も営業の腕を見込まれての昇進だから、断る訳にはいかないんだ」

「定時に、連絡を取り合うことにしたらどうかしら。例えば午後十時、たとか」

「メールでね」

「そうだといいわね。どうかしら」

理乃は茶碗蒸しをすぼめた唇に近付けながら、眉を動かさずにいった。絞られた座敷の照明が、唇をほのかに明るく染め、理乃の肌の白さを想像させた。いつの間に、こんなになまめかしい色を見せるようになったのだらうと、祐介は驚く思いだった。

「うちの社で出向となると、三年は戻れないというのが通例だと聞いている」

「年のうち幾度かは、本社出張とかもあるんではなくて。もちろん、私の方からも時間をみて出かけるわ」

「そう決まってしまうと、本当に淋しくなるな。これまで分かれて住んだことは一度もないんだし、学生時代から」

「私の方、将来福岡でも事業の展開を始めようという話がな

いではないわ。でも、今首都圏を固めるだけで、また手一杯なの」

「仕方がないか。理乃の肌の温もりを離れて、マンションに一人暮らす、とね。福岡には何度か行つた感触でいえば、悪くはない印象だ」

銚子四本が空いたところで、理乃の頬のあたりに微かに赤みがさしてきた。以前は二人とも強い口で、結婚前などは、安い酒を夜通し飲んで潰れなかつたことがある。理乃は、飲めば飲むほど青ざめてくるという質で、酔いが表に出てくるということがなかつた。

その点、祐介の方がまだ正直で、喋りが多く、くどくなるのだった。

「理乃の家系の方、お父さんも、弟も酒に飲まれたところを見たところがない」

「そうはいかないわ、父だつていくら頑強だからといつても、定年が近まつてくると、接待が辛くなつてきたとか」

「接待というのは、常に相手を立てての飲み方をしなきゃならないからな。いつも気を張つていなければならぬし」

「父の真似をして、酔わないふりをしているだけなのよ」

久しぶりに向かい合つて据わる理乃が、なんともなまめかしくて、二人だけの部屋でもあり、思わず触れた指を引き寄せたくなる思いを止め得なくなつた。

理乃が福岡の祐介の元を訪ねてきたのは、この五日間の休みを含め、二度目である。二度目が終つた今、福岡空港を

飛び発つた。

祐介は車の座席から、機影が雲間に消えたあたりを今一度見上げ、理乃の強い香りの残る空気を胸いっぱい吸うと、ウィンドウを開け放つた。

一年の間に、理乃の用いる香水の匂いがずい分変わったことにも驚かされたし、肌の瑞々しさは以前では考えられないほどになつた。

化粧のどこがどう変わったのかの子細はわからないが、以前より肌理が細かくなり、肌に吸いつきそうなほどに柔らかいのに、見た目は大理石の硬質の滑らかさを思わせた。その三十二歳の理乃を東京に残したまま、祐介は福岡での二年目の春を迎えようとしている。

祐介は一年と経たないうちに、現場の空気をほぼ掌握した。団塊世代が定年を迎え、住み古した家の処置をどうするかという時期にある。跡を空き地にしてマンションへの転居を求めるケースや、大々的なリフォームに進むケースもある。どちらも切迫した事情となり、いま不動産のかんりの量が、市場に出てきている。その仲介に当たるのが祐介の仕事であり、早くも一年にして、社の物件の最多売買数を達成し、本社での表彰を受けたのだった。

「政庁通りです。後はカンナで」

白井由紀からのメールを確かめた。今日から由紀担当の現場に出ると伝えている。由紀は祐介に次ぐ実績をあげ、共に表彰を受けたのだった。全国で二十人という優秀社員表彰を、支社から、しかも同じ支店から二人同時に出すということは

珍しいことだった。

由紀は福岡南部地区の担当であり、祐介は中央地区の担当であるが、明確な区割りがあるわけではない。口コミでの情報が入ることが多く、二人が同じ地区で競合しているという方が適切な表現である。

競合するというより、サポートし合うという方が当たっている。互いが物件や情報を提供し合うことで、客には社への強い信頼を与え、実際手際よく処理してきた。

由紀の魅力は、客の脈絡のない話を丁寧聞き、問いかけの持つ問題のいくつもの場面を想定しながら、答えるに十分ゆとりがあるということだった。殆どの場合の客が、「ほんのこれだけの説明で、よくも背中のかいところまで手の行き届くほどの理解ができますね」「すごい、よく判ってください」ということを返してくるほど、一度の対応だけで客の心をつかえてしまう、というのが強みだった。

由紀の風貌は、特別の美貌に恵まれているというわけではなく、話のテンポが良いというわけではない。むしろ逆で、ひどくゆったりとした表情と話しぶり、客の込み入った話を普通に静かに聞いているという姿勢を変えない。それらの話が内輪でよく纏まらず内容が錯綜しているとみえるときも、口を出さずに聞いている。その後、問題点を過ぎず、余さずに整理したと思える答えを出すので、まだ新人の、女性の営業担当という変わり種だと軽く思っていた客が、驚いてしまふという効果の用い方が上手いのかもしれない。

決して演出するのではなく、自然に身につけている接客の

仕方が、相手にそこまでは望んでいなかったのにと、驚きと安心を与えることからくるのだらうと思われる。

政庁通りというのは、祐介が担当している物件であり、二百坪の区画された土地に、五十年の空き家が乗っている。このあたりは由紀の担当区域であるが、祐介のリピート客からの紹介になる。

政庁通りそのものが古都太宰府のほぼ中心部にあり、物件としての位置も足がかりも好条件の部類にある。内藤という客からは両親の遺言により、姉妹が相続したものの、二人の居宅は同市内の五条通りに別にあるので、空き家物件を保持するための世話が困難になり、手放したいという相談である。ただ、客が躊躇しているのは、隣接地からのクレームに悩まされ、手放そうにも手放せないという状況にあるということであつた。

「この物件は優良です。ホームページに広告を出せば、ほぼ一月以内には商談が成立するものと思えます。どうぞご安心ください」

物件を見たときにそう説明をしたのだったが、客の内藤姉妹は「実は売却するに当たり、難問を抱えています。それを先に説明しておかないと、商談に進んだときに致命的な欠陥になってはいけないと思ひまして」と小声で切り出したのだった。

内藤姉妹の話によると、父母がこの地を手に入れたのは、現在のような開発による建築ブームが到来する前で、当時表記が「田」となっていた土地を直接地主から買い取り、自分



たちで整地し、上下水道を引き、道路も引き込んだのだという。お陰で、地価は破格に安く、かなりの広い区画を入手することができたのだそうである。

思いがけない良い物件を手にする事ができ、周囲にまだ数軒の候補地があつたので、父は会社の部下たち数人に土地を紹介したのだという。

特に懇意にしていた部下の佐藤と鈴木を隣人として迎えたのだが、売り手の地主側の思い違いから、その二軒の立地と道路との関係に行き違いが生じ、一軒の佐藤の方は道路と二メートル幅でしか接することのない宅地となつてしまった、というのである。二メートルだけの間口では所有する車も出入りに不自由するため、並びのもう一件の鈴木の方に働きかけ、鈴木の一メートルを好意で佐藤に使わせてやつてほしいという話しかけをし、上司の父の依頼ならと、鈴木は快く応じるとの素人の協定を設け、今日に至つていたのだという。

そのことが問題化したのは、夫妻が死去し、内藤たち娘に相続がなされてからのことらしい。鈴木から内藤の姉の方に連絡があり、「この土地をお世話して貰つたのはいいけれど、佐藤さんにうちの土地の一部を常時提供しているという訳なのね。調べてみたんだけど、このままではいざうちが土地を手放そうとしても、佐藤さんがうんといわないことにはどうしようもないの。佐藤さんはこの一メートルの幅の部分、五十年間というもの、もう自分の持ち分だと思ひ込んで。ほら、つい先日、この境界の問題の部分に派手な車庫を拵えただばかりなのよ」と五十年に及ぶトラブルの實際を、いきな

りまくしたてたのだつた。

「何度佐藤さんと話し合いを続けてきたか、分かつてもらえるかしら。佐藤さんはあなたたちのお父さんが上司として提案してくれた素人の協定のことを、正式に効力があるものと主張して譲らないの。分かっている筈よ、法的には対抗できないものだ」と知りつつ、既得権云々を持ち出す始末。むかむかしてくるので、もうタダでくれてやつてもいいと思うくらいなのに、本来の私の土地の上に、勝手にこのど派手な車庫よ。こうなつたら、ご両親から相続をした内藤さん、責任上あなたたちにうちの土地を買つてもらうしかないのよ」とこうだつたらしい。

内藤姉妹は、慌てて役所に向いて権利関係を調べ、佐藤鈴木とも話し合いをもつたが、両親亡き後のことで、法的には落ち度はないものの、二人の攻撃は当初土地の紹介をした父に責任をなすりつけるばかりで、姉妹はあまりにも激しく追い詰められたこともあつて、政庁通りの土地を売りに出したのだという。

その曰く付きだという土地であるが、形状、アクセス、手頃な広さという点で、実に優良な物件であつた。

祐介は、内藤姉妹に社員を同伴してもいいかという話をし、由紀と一緒に政庁通りの建物を訪ねる手配をしていた。

「白井という後輩ですが、この地区ではむしろ先輩に当たります」と紹介すると、内藤姉妹は若い女性の登場に怪訝な顔をしてしたが、「私は元々この一帯を担当させていただいて

います。多少でもお手伝いが叶いましたら、嬉しいですよ」という由紀のゆっくりしたものに、内藤姉妹も無表情に頷いた。肯定も否定もしないという、傍にいても邪魔にはならないというほどの領き方だったろう。

くだんの境界トラブルのことに話が及んだとき、由紀が「お客様のご心配には及ばない内容だと思われませう。法的に拘束された問題でも何でもありませんから、この土地を売却されることで障害になるものはありません。もちろん、関係のお二方にも納得していただけることですので、ご安心の上で、ご判断いただければと存じます」と、この地区の事情に詳しい由紀ならではのポイントをついた説明であつたものだから、内藤姉妹は驚いた表情で由紀を見詰めたのだつた。

「ここを売却するには、境界の問題を解決させてからでない駄目だ、という二人からの要求がなされているのですが、大丈夫なのですか」姉が聞いた。

「関係する市役所、法務局などで調べさせていただきましたが、お客様の方には落ち度はありません。今の形状のままでも問題はないのですが、関係のお二人の境界はお二人の間でしか解決できないのです。一方の方が一メートルほどの土地を、もう一方の方に売却していただければ、お二人の土地のその後さらに良い方向が見えると思われませうが、法的には欠陥云々というケースには当たりませう。長年のお付き合いで感情的になられており、双方が譲りたくないというお気持ちをご自分のためにも解かれれば、これは問題なく解決することです。関係のお二人に、最初から欠陥のある土地をお世

話されたのではないかということでお悩みのことは、これも長年の思い込みの感情から生まれたものです。もつとも、関係のお二人が、過去の拘りを捨てていこうと判断されることは、なかなか難しいということにはなりますが、誰かが誰かを裁いたりするという物件ではないということは、当社で十分確認させていただいております」

由紀の話は、内藤姉妹の杞憂を一掃するために、加えることも、引くこともない、実的に射たものだった。

「私たち、責任のなすり合いなどしなくていいんですか」

「でも、どうしてそこまでご存じなのですか」由紀は祐介の方に少しだけ目線を向け、「今回のために調べたわけではありません。お二方の一方から、以前私の方にお問い合わせがあり、ご依頼の方にはそうお答えしているものです」と、さり気なく答えた。

「だったら」と、安堵とも、驚きともつかない声を漏らしたのは姉妹だった。「あの二人とも、事情が解つた上でのことだったのね」といく分怪訝な表情を見せたが、由紀の存在に改めて目を瞞る様子だった。

そのことが、祐介の提案する条件の信用をもたらし、一気に成約に向かうことになった。

祐介と由紀は内藤姉妹の見送りを受け、予定の時間をかなりオーバーして出た。

祐介と由紀は、いつもの打合せ場所である途中のレストラン「カンナ」で車を停め、窓際の席に腰を下ろした。

「君の落ち着きぶりには脱帽だ。最初僕の方を向いていた彼女たち、すっかり君の方に向き直つてたな」

「花田さんのお話と手回しが十分だったため、お客さんがすっかりその気になられていたところに、少しだけ割り込んだだけです」

「君の話しぶりは実に要領を得ていて、相手を逸らさない。どころか、お客さんが本当は何を聞きたいのかということとまで理解して、そちらの方をさり気なく話す。聞きたいお客さんは、どうして自分たちの本音のところが解るのだろう、という驚きだな。この若い女性、といつては失礼だが、また大学を出て世間のことにも疎い娘の恰好をしている癖に、何と回転のいいことだろう。心配りが行き届いているんだな、というふうに相手の心を惹き付ける。すっかり見直した、という驚きからくる落差が心を虜にするんだらう」

「まあ、そんな詐欺師みたいな方」

「僕も、君の実績を掴む技量の一端を発見した思いだよ。最初の頼りな気な思いが、話を交わすうちになら難しいことなどをいうでもないのに、君の話に傾かされていく。ここが実にすばらしい。間近に体験させてもらったよ」

祐介は普段職場で顔を合わせるときの他の職員と殆ど変わることはない由紀と、営業現場での由紀の天性ともいえるやわらかなものいいとが、これほど力を発揮していたのか、と驚く思いでいた。芯のところの機転がきくというか、隠れた努力を重ねているというのか、双方ではあるうが、人の姿は簡単には分からないものだ、由紀を見て初めて思った。

「そうまでいわれると、からかわれているとしか思えなくなりますよ」由紀は少し頬を赤らめた。

「籠絡ということばは良くないが、君には生まれ持ったものがあるのかもしれないね。人の気持ちを逸らさないという」

「何をおっしゃいます、ただの一件のことです。ええ、お客さん断されたのでは、くすぐつたいばかりです。ええ、お客さんとの、間の持ち方のことは、お客さんから自然と教えてもらいます。それに、決して他社の批判をしないことにしています。むしろ、他社の工夫に気付けば参考にさせてもらいますし、お客さんがここはどうなの、と気にされますから、その意味は何だろうとお客さんの気持ちに寄り添うことにしています。でも、こういうと何だか偉そうですね」

「実にそうだよ。わが社の売りはここです、と説明しなければいけない場面もあるけど、見比べていた、だいて、お客さんの良しとされる方をお選びくださいという説明の方が、選択の幅を置いてくるということで、自由を与えていただいた方を取りました、と後で説明を受けることがよくあるよね」

そうである。総額は幾らぐらいが相場で、後は更地にしてアパートにするのだの、近くにマーケットもあるから好評だ、などとあまり細かい構想をいうと、相手の考えを縛ってしまうことになりかねず、例えばアパートだったら近所関係によくないな、などという材料を与えたりしかねないのである。

もつとも、結果として後がアパートになることもあり得るし、総額も買い手の都合で変動する場合もあるので、相場というものを明確に把握はしていても、是非にと求められれば

詳細に説明する、ということも祐介は心がけていた。

「今回の成約は、僕だけの力ではない。君の力が七分以上は入ってる」

「私の方など、福岡の関係では何度助けていただいたことでしょうか」

「この業界は、ここからここまでという明確な区割りはできないし、僕のリピート客の要望を君に相談したり、その逆のケースなど日常のことだからね」

次のアポイントがあるので、コーヒーを一杯飲むと、時計を睨みながらそれぞれの車で別れた。

祐介が二LDKの住宅マンションに戻ったのは、十時をいくらか回っていた。理乃からのメールがほぼ正確に十時頃入るので、できるだけ部屋に戻る予定ではいる。もつとも、付き合いで居酒屋にいたり、レストランにいたりしてもなんの問題もないのだが、飲みながらだとことを大仰に捉えてしまったりすることが多い。離れて暮らしていると、疑念を振り払うのに余計なことを考えてしまう。

理乃の肌の肌理の細かさ、白さには一段と磨きがかかってきた。つい先日福岡空港で別れたのだが、数日夜を共にしただけで、複数の男の影らしいものを微かに感じたのだった。

「ちゃんとケアを怠らないんだね」

「それはいわない約束でしょう。東京でも回源水の仕事で駆け回ってたし、整体や美容の方は活力の元なのよ」

「いろんなメニューがあるのだとか」

「ええ、目的よってはね。化粧につながるのが中心の仕事だから、自分のボディをまず大切にしないと」

「心の方も共に、ということ」

「そうね、心身共に大切だから」

いいながら、理乃は久しぶりに祐介の腕に飛び込んできた。理乃の肌は滑りそうなほどに滑らかなのに、熱くほてり濡れていた。学生時代から知り、十年を共に暮らしてきたのだが、今ほど理乃を身近に温かく感じ、同時に漠とした彼方に感じるということもなかった。

「祐介の方は」

理乃が囁いたことばに、凶星をつかれたのかと思えた。由紀と数度の関係ができたのは、つい最近のことだ。

「ああ、仕事が忙しいばかりでね」と答えると、理乃は何もいわずに、祐介の胸を指先で柔らかく突いてきた。

理乃からメールが入っている。

「今日も仕事は順調。不自由なことなし。でも、祐介に急にお礼がいたたくて。福岡の空港を発つとき、涙が止まらなくてね。回源水の仕事はうまくいってるけれど、手の届かないところにいる祐介を、いつも忘れたことはないわ。自分の年齢のことを考えるのは実のところそれほどではないのだけど、四年次のときに葬った子供のことが、最近たびたび思い出されて」

というところでメールは終わっている。この後にも最初は文字があつたか、何か書き足りない文面があつたのかもしれない

ないという気がしたが、そのことには触れずにいこうという約束であるので、祐介も「こちらも順調だよ。予想以上の成績にあるし、予想以上に忙しい。これは東京のときも同じだけれどね。理乃が一緒ではないと淋しいけれど、それはいいわな」ということだったから。理乃は今の自分を広げ、働き、楽しんでほしいな」と書いたものの、理乃の気持ちには十分には向かっていないという思いを抱きながらも、そのまま送信したのだった。

由紀の仕事の手際よさの評判は、どこの現場においても聞こえてきた。見た目には地味目にしか見えず、ものいいもそれほど器用ではないのであるが、一度、二度相談を受けると、相手が由紀の力量を感じ取ってしまうのか、まだ若い見習いかと見下していたこととの反動からか、「これほど相談者のポイントを深く理解し、ことばを返してくれる担当者には、まず出会わない」という印象を抱くらしい。

売買現場には、いつも複数の不動産会社が入るのであるが、以前のからの特別の関係がある不動産会社の場合を除き、同じ物件の売買についての方法や手順や、見込額の説明を各社から受け、それらを検討した上で、一番年若い由紀を専任担当者に選ぶという相談者の気持ちが変わらないではない。

要するに信用を得るということにかけては、他社のベテラン担当者の自信満々の説明に負けず、彼らを抜いて、専任担当者としての依頼の声がかかるのだった。

もちろん、専任契約を得てからの行動は、実に大胆とも細

心ともいうべき早さと手だてで、短期間のうちに成約に至るのである。

由紀は、入社二年を迎えたあたりから急速に力をつけ、成績優秀者の上位に選ばれるという実績を挙げている。

由紀の売買手法の特徴として、かねてから同規模の物件の購入を希望している個人を入念にリサーチしておき、現場に案内する。しかも、この物件には競合者があるのだという実際を伝え、競合者の双方に近日中に成約の見込みだとの情報を与える。すると、売買額がやや吊り上がることになり、かつ、購入気運が一気に熟する。というのだった。よって、競合することで自然に期限が設けられ、売買が早目に成立するということになった。

それらが、少しも強引さを伴わない流れの中で成るため、二者が真剣に検討し、納得した上で売買が成立する、という流れになった。

祐介もほぼ似た手法で現場に臨むのであるが、由紀の場合は「凄腕の営業マン」という顔を見られることなく、「女性営業者のやわらかな手だて」と見なされるので、女性の営業者が少ないこの職場では、かなり有利に働くのだった。

由紀の手腕を知った客の口コミで、由紀を名指ししてくる客が増え、営業担当の中で、祐介と由紀が一、二を争う人気担当者になっている。

現場に出る回数や、延べ時間の多さはもちろん、夕方の客の茶の間に通されるのも二人が他を圧倒していた。客の家を

出るのも十時を過ぎることが稀ではなく、支店に帰り着くと祐介と由紀がよく顔を合わせた。

「遅くまで、いつもご苦労さん」

祐介は理乃から届いたメールを確かめ、「こちらも、視界良好」という意味の返事を返したところだった。理乃がこれから赴くところが、職場の関係であるのか整体なのかなどといつも思いを巡らせてはみるが、それ以上は思いに止めないことにしている。理乃の方も、祐介のことに思いを止めないという約束なのだから。

たいていの場合、翌日は現場に直接出ればよいのだったから、殆どが午後の時間の出店となった。「飯食つて行こうか」祐介がときどき声をかける。由紀のマンションも同じ団地に複数棟ある中の別棟だったから、領き合うとそれぞれ自分の車を発進させ、マンションの駐車場に車を置いた。

由紀が出てくるのを待ち、傍のタクシーを拾うと岡の上のレストランまで移動する。由紀はバッグが一つという軽装であり、祐介は手荷物を持たない。

街の光が一望できるいつもの席に腰を下ろすと、軽くビールで乾杯し、ワインになる。夕食は二人ともまだなので、軽いものをそれぞれが選んで頼む。

由紀は帰りの車の中ですばやく化粧を整えてきたらしく、淡い灯りの下で、昼間の落ち着いた顔とはまた少し違う、穏やかな顔を見せる。この子はこんなリラククスした表情をもっているのだ、と祐介は仕事中の落ち着き払った表情をやはり営業用のものであったのだと安堵する。

「ここから見る君の横顔、素敵だよ」

祐介は思わず口に出した。まだ、二十六歳なのだ。丸くすぼめてみせた唇が初々しい。

「不思議だなあ。あのしつかり者の君は、今どこにいるんだろう」

「何も変わっていませんわ」

「また、こう、新しい美人を発見した思いだよ」

「何か、だらしなくなっているのでは」

「違う、違う。やはりどこかに学生の匂いがある。仕事に向き合う君も好きだけど、素の表情を見付け、安心したよ」

由紀は食後のデザートを口に運びながら、ワインで酔ったのか、目をわずかに染めている。まともに互いの目を見合ったためか、口元に笑みを浮かべて。

祐介は最初に由紀と身体を合わせたとき、かなりの男を知った身体だなと見てとった。聞いてみると、演劇のサークルにいたらしく、今でも日を決めて会う相手がいるのだという。「彼、演劇に生涯を賭けるつもりで、仕事には就いていないのです。役者になる素質は十分あるのですが、なかなかチャンスに恵まれない。いつも、東京に行ったり、大阪に行ったり、田舎の演劇仲間と打合せたり。だから、彼の生活費の大半と、将来役が付くまでのために、なんとか私が頑張ろう」ということで、由紀自身、自分も求めていた演劇の才能に見放されていると知った代わりに、できるだけ収入の得られる今の仕事に就き、演劇のサークルで得たコミュニケーションの力を生かせるかもしれないと、珍しい女性営業者として

ての職を選択し、彼の演劇をサポートすることにしたのだと  
いった。

「なるほどね、君の腹の据わった仕事ぶりの由来はそこにあるのか。それにしても、演劇の彼が羨ましいな」

といった話をしたのは、まだ最近のことである。職場で、現場で見せる、ゆったりと構えた姿勢や落ち着きは、こういうことにあつたのかと思つた。

「今晚は、彼との約束はどうなの」

由紀が首を横に振つたので、タクシーを拾い、以前利用したことのあるホテルに向かつた。ワインが効いているらしく、由紀は立ち上がりかけて少しよろめいたのか、テーブルに軽く手を突いた。

由紀の肌は熱かつた。喉元を仰向けにしたまま、目を閉じ、何度も激しく震えた。

理乃からのメールが届いた。祐介は珍しく十時前にマンションに戻っていた。

「回源水の仕事はとも順調。お陰で、私にも講演会の役目が回つてきたの。ほら、最初展示場を見たでしょう。代表者が努めたあの役。私の話の間の取り方と、よく手入れをした肌の色がみなさんを納得させるんですつて。で、本部はもちろん東京だし、本部での展示会は変わらず行ふの。私には、開拓をめざしている大阪の方をやつてほしいということなのね。スタッフは、半分ほどが大阪に移り、活動が根付くまでは代表者も半ば以上大阪入りということ。となると、当分回

源水の仕事を離れられなくなりそう。というより、大阪専従の予定とのこと。その替わり、しばらくの準備の間をみて、短期間福岡に行こうかと思つてるの。長くて三日かな」

理乃の機嫌の良さが伝わってくる。祐介がまだ福岡の任期を二年近くも残しているというのに、理乃の方が大阪専従となる。少し福岡の近くに異動するとはいへ、別居生活がいよいよ複雑になる。理乃は何を考え、こう機嫌が良いのだろうという思いになる。ひよつとして、「回源水はもう辞めなよ」といつてほしいのかなという考えも浮かんだが、理乃の日頃のプライドの高さを考えると、そういうブルーな考えに陥りそうにはない。例の、数百人を前にしてのセレモニーを司る役を得る、という達成感の方に浸っているのだろう。

「日頃の希望が叶えられるつてことかな。だとすると、ビツクなおめでとうだ。細かいことは福岡で話そう。ところで、いつ福岡に」

というメールを返したら、間を置かずに「週末、そう明後日になるかな」との返事がきた。「了解。空港に出迎えるけど、時間は」との問いには、「講演会が終わつてからだから、二十一時頃かな。先に食事をして、マンションに向かうつてのはいかが」「了解」というやり取りで終わった。

週末の午後までには、内藤姉妹の売買が完了する予定だから、タイムリーといえた。姉妹の方の手続きは滞りなく進み、当初の一割高で、買手手の青空住宅の責任者との間での契約に臨み、経費の精算を行い、約二百坪の物件の処置が済み、祐介の業績にカウントされることになる。今年は、昨年にも

増して早いスピードで成約数を獲得しており、支店はもちろん支社の業績グラフの最上位を刻むことになる。

業績でいえば由紀の方もかなりのもので、十人を擁する営業担当者の業績の半数を二人で占め、祐介と由紀の件数の差は横並びに近かった。売買額ではかなり由紀を上回っているが、口コミから個人宅の売買を次々に纏めていく由紀の手腕は、劇団員の彼との生活のためという目的があるにしても、由紀の相手を逸らさない、根っからの人柄がそうさせているのだと思えた。確かに、由紀の話しぶりや落ち着きぶりや、ときに見せる素人っぽさも、劇団の中で培ったものかも知れなかつたが、相手のことばや態度に、柔軟に対応できるといふ訓練や努力の賜といおうか、特筆すべきものの持ち合わせがあるのだと思えた。

急ぎ連絡をしないとイケないのは、内藤姉妹の契約が成就したときには、今回は特に由紀の助力が大きいこともあるので、少し気の利いた食事でも奢らなくてはと約束していたことだった。その約束を後に延ばさねばならなくなつた。

携帯にはすぐに出た。ゆつたりした由紀のいつもの声である。この時間に取り引もないものだが、ものいいは昼間のものと変わらない。ただ、祐介が相手だということ、どこかに少女らしい笑いも出る。

「私の方のことでしたら、何の差し支えもありません。ご都合の良い方向でお進めくださいませるか」

「何らかの差し支えがおりなんでしょう。お聞きしない方

が、たいていの場合、よろしいことのようにです」

お聞きしない方が、という以下の台詞は、仕事の場合もそうでない場合も、相手のプライベートなことには話題が出ない限り立ち入らない、という由紀の姿勢が感じられる。祐介の今の場合は、「どうかなさつたのですか」という一言があつてもいいのにも思ひかけたのだったが、すんなりと話が運んだので、そのまま携帯を置いた。

と思うと、コールがあるので発信者を見ると由紀である。

「ええ何か」

「ごめんなさい。少し勘違いしていました。今夜は何故か眠れそうにありません。これからお話にお邪魔してもかまいませんか」

祐介こそ、理乃のことがあり、うまく整理できないことを考えていたので、由紀の方の詳しい用件も聞かずに「どうぞ」とだけいい、切つてしまった。

由紀の部屋は、同じ団地に設けられた社宅マンションの、最も北端の棟にある。部屋番号は知っているものの、訪ね合うことはなかつた。そうはしない方がよいだろう、という暗黙の決め事を課していた。

祐介には理乃がいるし、由紀には演劇志望の彼がいる。この決め事の敷居を跨いでしまうことは、やはりいけないことに違いないと思つた。由紀も同じ思ひの筈である。

数回身体を重ね合つたとき、二人はホテルから時間を違えて出、以降の支店や現場での態度は崩したことがなかつた。



由紀がドアを軽くノックした。スーツ姿のままの祐介はその恰好で玄関に出、戸外の風を引き込んだ。

俯いた恰好で入ってきた由紀は、ゆっくりと顔を上げたが、いつもの落ち着いた表情だった。特に憂いを包み込んでいるという気配も、アバンチュールを試みているという素振りもなかった。

「申し訳ありません。こんな夜分にお伺いしたりして。実は、どうしても申し上げておかなければ、嘘の上塗りをしてしまふということが、心苦しくなりまして」

向かい合った椅子に腰を下ろした由紀が、ゆっくりした口調で話すことは、これまでに聞いていたこととはまるで違うものだった。

由紀のことばによれば、実家で手堅く営んでいた賃貸業が、従業員二人の陰謀によって五年前に代表権を奪われ、その騒動により大きな負債を背負わされることになったのだという。父は倒れ、半年後に死亡。母は入院、由紀は負債のかたにといういい分で、その従業員たちにもて遊ばれることになった。ところが、従業員たちの因業ぶりは周辺勢力との縄張り争いにまで発展し、二人は地元暴力団との刃傷沙汰により捕縛され服役し、以前の家屋の全部をこの会社に買われるかたちで、今の由紀に至っているというのだ。

もつとも、通っていた大学の演劇サークルのことは事実であるが、演劇志望の彼の生活を支えるというのは架空のことで、母の入院費と、歳の離れた弟の学費を賄うために、営業職として拾ってもらったのだという。

「ですから、父たちが抱えた負債のことは今の会社への売却というところで決着をみましたが、母と弟の生活を私が担わねばならないことになった、というのが真実なのです。個人的な事情とはいえ、誤解をお与えしてしまっているのではないかと、気が気ではなくなっておりまして」

由紀の双眸には、涙が溢れ、次々に流れ落ちていた。祐介の頭の中では得体の知れないものが回りだし、何度由紀の肩を抱きしめようと思っただかしのれない。

「そうなのか。そうだったの。だから、君は奇妙に落ち着き払った人だったのだ」

「半ば捨て身で、泣くことも忘れ、四年余りを過ごしてきました。この身体の汚れは、どうあがいても落としようがありません。でも、母たちをなんとかしなくてはとの考えが先に立ち、身を捨てすることもできず、何とか耐えてきましたが、これらがよいことだったのかどうかと、いつも考え込んでしまっています」

突然降って湧いた話のあまりのことに、祐介はことばを発することもできず、誰かが自分を担ごうとしているのではないかと、唸るばかりだった。

由紀はそこまでいうと、涙を拭うこともせず、静かに椅子を立った。追おうとすることもできずに動けない祐介の前を、由紀の姿が静かに去って行った。

二十一時をややオーバーし、航空機は到着した。この時間帯はビジネス客たちが多く利用する便らしく、到着ロビーに

はスーツ姿の二、三人連れが幾組も下り立った。

後部席だつたらしい理乃は、客の群がまばらになつた後、紺のスーツ姿で歩いてきた。

「ごめんなさい、待たせてしまつたわね。席のキャンセルを待つて、やっと乗ることができたの。この恰好は講演会場から直接駆け付けた、というものよ。最近なかなか時間通りに終わるといふことができない、という嬉しい悲鳴の連続。会場で引き留められる時間が長くなり、開発した化粧品類の販売も順調でね」

「すごい変わりようじゃないか。春にきたときには、まだアシスタントに過ぎないという風情だつたのに、マスター姿がすっかり板に付いたんだね」

「まさか、スーツのせいでしょう。着替える暇がなかつたものだから」

「回源水、すごい勢いなんだな」

「浄水器の支持も増えてきてね。ともかく、一度蛇口を捻ると、素晴らしい自然の水に出会える。これを経験すると、もう手放せない。水の粒子がピチピチ跳ねている。生きているのよ。魔法でもなんでもないのよ。いかがわしい薬品なんて、一切使わない。京浜理工大学の研究室と溪流社との共同開発になる、微細粒子への濾過の精密さ。これだけのことが、生活をガラリと変えてしまうのね」

「そのくだりはゆっくり聞かせてもらおうとして、どう、食事の方は。たまには寿司でもどうだろう。福岡は魚が新鮮だから、ネタが旨いんだ。最近見つけた店なんだけど」

「いいわね、OKよ」

理乃からキャリーバッグを受け取ると、横に並んで歩く。到着客の殆どは、急ぎ足で前を歩いて行く。理乃の姿勢は、以前より伸びやかに感じられる。

タクシーを拾う。アルコールが入るのを見込んで、自分の車はマンションの駐車場に置いてきた。祐介も、着替える間もなく空港に駆け付けたのだつた。タクシーに三十分ほど走つてもらい、目当ての玄海寿司に着く。

「お客さんに紹介してもらい、入つたんだ。何を食べてもネタが違う。上がつたばかりの新鮮なものを出してくれる」

遅い時間にもかかわらず、客が多かつた。一番奥の席に落ち着くと、ようやく互いの顔に向かい合うことができた。

理乃は三日間だけ、暇をもらつてきたという。「大阪への進出というか、大阪からの招致という方が正確ね。会員は首都圏を中心に順調に増えつつあり、関西圏にも多くてね。会員が会員を紹介するという独自の手法が当たり、この情報化の時代に一本もCMをしないという本物志向が、逆に信用を生むということなのね。CMでいえば三又電器や第一浄水器などがさかんにやっているのを実際私たちが購入し、実体験してみるの。お客さんの中には、そちらの製品に飽き足らなくて、溪流社の回源水に辿り着いたという場合が多く、関西圏にもニーズが溢れているということなの」と、以前聞かされた経緯を口早に話す。

運ばれてきたブリ、イワシ、イカ、甘エビという、見た目にはどこの寿司とも違わない一つを口にした理乃が、「この

イカ、透き通って甘い。柔らかいけど、歯ごたえがいいわ」と、驚きの声を挙げた。「タイはとてもさっぱりしてるし、新鮮な味だわ。そう、回源水で処理したお魚みたい」といった。

祐介は理乃の反応を確かめながら、「僕もそんな感じがするんだ。ネタがシャキッとして、味が生きている。大将の弟二人が交互に海に出、直に上げてくるんだそうだ」といいながら、ビールで乾杯した。

「回源水も同じ原理を用いているのかもしれないね。太古の湧き出たばかりの水に限りなく近い、つまり本物の新鮮ということなんだ」

「何年も何年も、春夏秋冬に分け、森の奥の湧き水の味の変化を調べたらしいわ。夏の水、冬の水という具合に源流に降るかたちも味も違うのに、湧き水として採取するときには同じ成分の同じ粒子になるんだそうよ。その仕組みを浄水器でほぼ完璧に再現できるまでに、十年を要したというの。仕組みの方は私たちにも明かされていないわ。特許として認められ、実用化に踏み切ったということだけど、最初の頃は見向きもされなかった。それを、目の前の一人一人を相手に信じてもらうことから始めたのよ」

「そのくだりを、会場一杯の客の前にナレーションでやるという寸法だ。ビデオや、効果音や多少の趣向も交えて」

「そうには違いはないわ。濾過の仕組みに特別の手法が用いられ、他の浄水器との差ができるというの。なんでも、湧き水の落ちる音にヒントを得たというところしか、私たちにも

知らされていないんだけど」

「企業秘密だからな。しかし、よくも首都圏の膨大な水を一つの浄水器で、太古の水に変えてしまうなどということ、可能にしたものだ」

「最初もいったと思うけど、そんなことがある訳ない、と私自身、何度も何度も、何十度も台所で試したわ。そのうち、私だけの思い違いなのかもしれないと、同じ疑問を抱いている人や、全く初めて出会う人々の生の声を、疑いながら聞いてきたの。それが、いつか確信に変わったという訳」

もともと理乃は、週刊誌の見出しや、流行だといわれるものごとには批判的になるタイプであった。性格的にプライドが高いということもあり、他の多くの好みを追いかけることには組しなかつた筈だ。

それが、信じるに足ると思つた途端に信者になるというのもよくある話であるが、理乃ならずともこの種のプライドの高い層は、多少この傾向が強いということとは否めない、祐介は思っている。

「このブリの味のコクが堪らなくてね。タイも、カツオも、甘エビも抜群だね」

大将が近くにきたのでそう話しかけると、大将は「何時であらうと、何度も味を確かめるのです」とだけいい置いて、調理場に戻って行った。

二杯目のビールで心地良くなり、腹を満たしたので、理乃の旅支度も解かなくてとは、マンションに直行した。

理乃の肌は、一日を働き、飛行機で移動してきたというのに、疲れを見せなかった。

シャワーを一緒に使ったのだが、理乃の肌を弾く水が玉になつて落ちて行つた。肌理の細やかさはいよいよ増したに違ひなく、大理石を思わせる表面は硬さを感じさせるのに、指で触れると風船のそれを思わせた。

理乃の勧めもあつて、回源水を用いたシャワーに替えており、台所の水も回源水を用いているから、シャワーの後のコップ一杯の味も心地良かった。

「これからのことだけど、東京のマンションどうしようかしら。大阪に移つたら、二年や三年では戻れないだろうし」

「僕の方は、二年後には多分間違ひなく本社に戻る手筈になるだろうから、東京を引き払う訳にもいかなないか。こういうことなら本社に相談すればうまく進められることだから、後にはやるよ」

「大阪のマンションは溪流社の契約物件だというわ。そんなことより、なかなか一緒に暮らせないということね」

「それが残念だ。ところで、以前、子供ができるとかできないとかいってた、あのことの方、話は先に延びるんだね」

理乃のなめらかな肌は小刻みに波打ち始めており、もう答えようとはしなかった。祐介は壊れものでも扱うみたいに、そうつと両手に包み込んでいった。

祐介は福岡支店にきて、初めて休暇を取つた。理乃の三日間に向き合つてやりたいと思つたからで、できれば水郷柳川

や、高いレベルの美術展示で名高い久留米石橋美術館などを訪ねてみたいと思つた。その他にも、恩讐の彼方にの舞台である青の洞門や、雄大な阿蘇の風景、別府温泉、星の村と、理乃を案内したい候補がいくつも頭を巡り、手始めに柳川方面に車を出そうと車庫に出て部屋に戻ると、理乃が心急ぐ様子でキャリーバッグを開けているところだった。

「あ、あのね、急に戻らなくちゃいけないくなつたの。本社の方に。悪いわ、せつかくのお休みだというのに」

どうしたんだと聞くより早く、

「一刻を争う事態。代表者が何者かに刺され、大学病院に搬送されたというの。本社の企画部長も取り乱してて、訳が解らない。なんだろう、まるで見当がつかない」

理乃は大急ぎで身支度を済ませると、「空港までお願い」と昨晩のスーツ姿で玄関を飛び出した。車に乗ると、まだ途中だつたらしい肌を塗り、口紅を引き、髪を整えた。

当日券を求めると、離陸寸前の機に走り込んだ。後ろの祐介を振り返ることもない、駆け足でのUターンになった。祐介はロビーから、上つて行く機影を見送つた。春に見送つたときには、頬にキスをして別れたのだったが、今はまともに話す余裕もなかった。

機影が雲間に消え、微かな音だけが残るのを駐車場に立ちながら聞いたが、思いを振り切ると、マンションへの道を走つた。これからどうしよう、と考える。理乃からの連絡を待つ方がいいとも思えるし、一人の時間をマンションで過ごすのも息苦しく思える。ならば、常々出勤する時間をそう外れ

た訳でもないので、会社に出てみようと考えた。

身支度を調べると、現場にはなく支店に向かった。案件を十五件抱えている今、行けば仕事が入っている筈だった。支店長に挨拶をすると、「丁度よいところへ。ところで、今日は奥さん孝行するんじゃないのかな」と聞いてきた。「意外と早くサービスを終えることになったので、案件が気になり社を訪ねました」と答える。

「内藤さんの隣接の、くだんの境界問題の二軒だ。両者から売却相談があり、君か白井君に声がかったんだよ。何でも、和解した上、良い条件で売却したいということだ」

「分かりました。連絡の上、出向いてみます。ただ、あそこの物件は白井君主導で臨んだ方がよくはないかと思うのですが。僕はサブの方に回ります」

「了解。白井君に連絡を取ってみる。その間、待つてくれないか」

支店長は由紀に仕事の内容を伝えると、受話器を置いた。

「彼女の察しは早い。こちらのいわんとするところの先まで、全て理解してくれる。もちろん君がサブで付くという点も了解だ」

祐介は急ぎ車を回した。見慣れた町の、見慣れた道だ。幾度も曲がった角を右折する。先に、由紀の白のプリウスがきている。丁度ドアを開けたところで、顔を合わせるかたちになった。「やあ、先日は」と祐介がことばをかけると、由紀は笑顔で頭を下げた。

「支店長から声がかかるとは、さすがだね」

「花田さんがお休みなので、と支店長はこちらに話を回されたということでしたわ」

「いやいや、君の力量は誰もが認めるところだ。お客さんも、僕か君かということだったらしいので、同行させてもらうことにした。ここは以前の経緯からも、僕の経験からも、君が前に出た方がいいと思うよ」

佐藤の敷地に鈴木も立ち、祐介たちが着くのを待つていた。「ここが問題の一メートルです」

佐藤がいった。鈴木が頷く。ここでは話がし難いので、応接間を広く構えているという佐藤の玄関から入った。白のプリウスの横では、内藤姉妹から二百坪を買い取った青空住宅の関係者たちが、測地と思われる作業を行っている。中の一人が、祐介と由紀の姿に気付き、日焼けの顔をほころばせた。「先日はお世話になりました」と由紀が返す。

鈴木と佐藤は、以前由紀に相談をしたことがあるので、

「問題の一メートルをどうするかなのですが」と切り出した。由紀は、「二戸が同時に他者に売却される場合と、一方が先に売却される場合とで多少やり方が異なりますが」と聞いたが、時期は異なることになっても、それぞれがいつでも売却が可能なる状態にしたいとの希望であったので、「一メートル幅の、奥行き十五メートルを鈴木さんが佐藤さんに売却し、佐藤さんの方からみれば購入の処理をなさいませんか。そうすることで、後々お二人の物件に対する評価が双方とも上がるというか、ご懸念の材料がなくなります。いかがでしょう」

第一番目は、これまでのいろいろの経緯はおありでしょうが、双方に益することになりますので、佐藤さんがこの一メートル幅、奥行き十五メートルを購入していただき、事情がどう動こうともお二方に差し支えがないという要件を整えるということではいかがでしょうか。そのためには、佐藤さんの方が正式な購入という手続きを踏んでいただくことになりませう」と由紀が二人の目を交互に覗き込みながらいうと、二人は「そうしましょう」と、容易に納得した。

併せて、内藤姉妹の土地に隣接する方の鈴木土地の売却希望があるという申し入れに、由紀が専任担当者となつて行うところまで一気に話が進むことになった。

鈴木と佐藤に見送られ、祐介と由紀は外に出た。時間にして、一時間とかわからず、五十年に及ぶ問題に、由紀はいとも簡単に道筋を付けたのだった。

「君の話しぶりを聞いていると、こちらの心にまで響いてくるから、たいしたものだ。二人のいずれの方にも、同時に向き合つてるんだな」

「花田さんが、先に内藤姉妹の方の結論を導いてくださったから、今回はお二人に和解していただく上で、内藤姉妹と同様の措置をいたします、という非常に分かり易い説明をしたまでですわ。この土地の扉を開いてくださった花田さんに感謝です」

由紀の表情には、静かに立ち去つた晩の思い詰めた顔の色はどこにも感じられず、優秀営業表彰を受ける社員の落ち着きが、全身に漲つているとの思いを受けるのみであった。

理乃に電話を入れ、メールを入れているのであるが、先方の電源が入っていないらしく、通じない。「羽田に着いた、無事」という短い連絡など怠らない理乃にしては珍しいことである。急いで飛び発つた朝のことが、祐介自身にもうまく飲み込めない。代表者が刺された、と顔を強ばらせ、ひどく狼狽えていた。

しかし、テレビニュースなどでも報道がなされない。たいした深手ではないのだろうか。ネットの情報にも流れていない。祐介はもともと客との約束を入れていなかったため、八時にはマンションに戻ってきた。

理乃と離れて暮らしてきたこの一年半、メールでの連絡は欠かさないできたが、それぞれがどこでどう働き、何が大変であるのかなどのやり取りは、全くというほどしてこなかった。であるので、理乃がどういう経緯で大阪の講演会担当になつたのかについても、詳しいことは知らない。

代表者が刺されたということがどういふことであるのか、どうしてあれほど大急ぎで駆け付ける必要があるのか、要領を得ない。そもそも今、理乃が正確にはどういふ職位にあるのかも知らない。

ちなみに溪流社の本部に電話を入れてみたが、社員に浮き足だった感じはなかったし、平常通りの業務を行つていふことだった。理乃が口にしてきた企画部に回してもらつても、窓口の対応と同じだった。

ついでに、花田理乃の名前を出してみたが、正規の社員の

中にはなく、販売支部の責任者や主要会員の中にもないということだった。

いったん電話を切った後、企画部に大阪支店の準備について差し支えない範囲で教えてほしい旨を告げると、先方はかなり渋っていたが、そういう計画はなく、ひよっとしたら上層部だけの青写真なのかも知れませんが溪流社の経営方針を検討する企画部などの会議では、案が出されたことはないという意味の返事で、あまり立ち入ったことを訪ねるので、祐介の名前や立場を逆に厳しく尋ねられる始末だった。

話からおおまかに受けた内容は、回源水や回源浄水器の品質が格別に優れていることは確かであるが、大手の三又電器や第一浄水器のCM攻勢をまともに受け、シェアの伸びがかなり鈍化しつつあり、現在の状況では経営方針の見直しを余儀なくされている、ということを示唆してくれたのだった。その販売実績などの推移、取扱商品の一覧などに鈍化がみられるのは、大手が打つCMというもののへの対応をどうするかという課題に直面しているという様子を読み取ることができ、ホームページに掲載された代表者の氏名や挨拶が、一年前とは明らかに異なっているのを知ることができた。

以前の代表者は、祐介が講演会場で見た人物に違いなく、「太古の森の奥深くに流れる天然の水。天然が持つパワー。その天然の水に限りなく近い水を家庭でも得る、というのが溪流社の永遠の、そして日々の目標である」という謳い文句を高らかに掲げていた。

その謳い文句は変わらないものの、現在の代表者は当時の

青年代表者とはまるで違う人物であった。研究室の肘掛け椅子に背筋を伸ばし、白衣に身を包んだ傲然とした風情の男。京浜理工大学での研究歴が示され、教授職に就いて二十年というもので、斯界においての権威であるということが、経歴から余すことなく示されている。ということは、京浜理工大学初のベンチャー企業として、溪流社を全面的にバックアップしていることを意味していた。

とすると、理乃のこの一年半というものが分からなくなってくる。祐介は、溪流社の中枢近くにいるものとはかり思い、疑うこともなかったのだが、改めて、理乃が残っていた名刺に見入った。「溪流社の回源水が育む美の究極」という形容のもとに、「回源水美容部門総括」という文字が刷り込んでいる。

これを改めてよく見ると、整体に足繁く通っていたことや、回源水を用いたスキンケア商品、ボディケア商品などの販売に当たるといふことや、リラクゼーションのための環境音楽が流れる中、といったことばの意味が現実のものとして現れ出てきた。

確かめもしなかったことであるが、理乃の肌が大理石の白さに変貌し、指先を弾くほどの瑞々しさに変わってきたのは、理乃自身が美容ヘルスセラピストとしてあるのではないか、ということによく気付いたのだった。

オイルマッサージなどを用いた美容ヘルスセラピストとしての実践の中から、「子供ができない身体になった」ということを呟くようになったと考えると、あの大理石の肌こそが

まぎれもない商品であり、広告塔であるのだといえるのではないのか。そう考えると、回源水美容部門総括という肩書きの意味を直感することができた。

迂闊なことだった。福岡に赴任してから東京本社には数度顔を出したものの、理乃と過ごしたのは自宅マンションではなかった。仕事が過密であったのが最大の理由ではあるが、殆どが日帰りの出張であったため、理乃と会うのは羽田周辺のレストランやホテルでの食事であり、休憩であった。

練馬のマンションを訪ねたのは、赴任以来今が初めてである。懐かしい建物を見上げる間もそこに、八階の自宅の前にきた。ドアの前に立ったとき、全くというほど人の気配がないのに気付いた。それは昨日今日というのではなく、かなりの期間人が住んだ匂いが感じられない。急ぎ鍵を開け足を踏み入れると、荷物はまるでない。残されたものは、祐介が置いて出た古着が主である。理乃の衣装筆筒を開けると、何も無い。化粧道具も残されていないし、フロアにも、水回りにも生活の匂いが無い。重く空気が凝っている。

祐介はカーテンの引かれた窓を開け、キッチンテーブルの上を撫でた。埃が手の形を描いた。ソファにも、ベッドにも微かに綿埃が積んでいる。二人の電話は携帯とスマートフォンだし、祐介が出た後には物という物など殆どなく、これでは空き家であるといっても間違った形容ではない。

ともかく、理乃はどう暮らしていたのか。毎晩十時の連絡は、どこから発していたのか。訳が解らなくなった。マンシ

ヨンの管理会社に問い合わせても、家賃は途切れることなく入っているという。それはそうである。祐介の口座からの自動引き落としだからよしとして、電気料金、水道料金は、一年以上前から基本料金のみで収まっている。台所には、真新しい回源浄水器が座り、シャワーも器具が取り付けられたままであるが、バスタブに湯が張られたという形跡もない。

祐介は、何度目になるのか分からない理乃の携帯を呼んだ。福岡空港を発つて以降、電源が落とされたままである。「代表者が刺された」ということだった。であるなら、なんらかの連絡が頻繁に交わされていない筈はない。しかし、別の営業用の携帯が用いられているのだとしたら、祐介には入り込む術がない。

どこかに理乃のメモなど手がかりが残されていないか探してみたが、見付からない。そもそも、家を出てどこへ行くというのだ。肝心の祐介への連絡もなしに。十年を共に過ごした理乃が、こういう緊急のときに連絡が取れないことになるなど、考えもしないことだった。それぞれが別れて生計を立てるといっても、夫婦だ。

ここまで考えても、これからどう動きようもない自分が苛立たしかった。

そもそも美容ヘルスセラピーとは何なのか。どこで営業をしていたのか、頻繁に通うといっていた整体とは何か。

自分が熱くならないよう息を整え、これまでに理乃が話してきたことを整理し、並び変えてみる。

祐介は、理乃が溪流社に関係する組織について、主として社



の方針を発信する職、それも社の中心に近い場所において、かなり主要な存在に違いないと思っていた。事実、理乃から聞かされる話は、代表や企画部といった執行部の面々とおぼしき連中とのことばかりであるし、彼らと行動を共にする中で、環境音楽に乗って登壇し、多くの会員に溪流社の目標や方針を語りかけているという姿だった。

溪流社の業績は順調に伸び、首都圏を溢れた会員の要望に添うかたちで大阪に出張所を設けるという話に違いない筈だった。理乃は大阪の方の専属になるということも。

祐介は、仮に溪流社のホームページを見、想像を巡らそうとしたとして、理乃の説明に違いがあるなどとは思いうこともなかっただろう。

そうなること、やはり理乃の勤務先は整体院そのものの方だということしか考えられない。まさに、回源水から作り出したスキンケアやボディケア商品を用いての実地の場合。そう考え、透き通るほどに肌の美しさを急速に増した理乃の姿を、美容とリラクゼーションの整体院なるものに置いてみた。

溪流社の主流から外れた元代表者が経営権を持ち、系列のヘルスセラピーの店舗を多く抱える。理乃は元代表者の傍にいながら、主要な客にセラピーを施す、という図が祐介の頭の中にたちどころにできあがった。であるなら、施術者でもある理乃の携帯の電源は平時には入れられない、というシステムになる。

バカな、と呟いてみたものの、これに似た流れがあってもおかしくはない気がした。それほど、理乃の話の中にオイル

マッサージなどを用いた美容ヘルスセラピーということばが度々出てきたし、あたらしく開発した化粧品が人気を呼び、会員が会員を呼んでくるということでもあった。

最後のコールをと思つて携帯を取り出すと、由紀からのメールが一件と、会社からの用務が数件入っていた。由紀のメールは、「佐藤さん、鈴木さんのことは順調に進んでいませ」ということと、「花田さんの方はいかがでしょうか」ということが簡単に書かれていた。「佐藤さんたちの件、よろしくお願いします。私は大丈夫、ありがとう」と書きかけたものの途中で文字を全て消去し、「後刻連絡します」という返信を送付した。会社からの案件は、新たな物件が出たとのことであつたので、「全て了解しました」との文面にした。

それ以上は動きようがないのだった。迂闊といえば、これほど迂闊なことはなかった。「代表者が刺され大病院に搬送された。企画部長も詳細を把握していない」といい残し別れたままである。これだけのことしか分からない。マンションには、疾うから理乃はいない。「どういうことだ。いったい、自分たちはどこで何をしていたというのだ」と声を荒げても、出食わす人が奇妙な顔で振り返るのみである。

卒業生仲間のリストをと思つても、手元に適当な資料を持たない。理乃の友人はとなると、普段の生活に無頓着でいただけに、そちらの方もまるで覚束ない。

祐介の会社の、本社不動産販売の担当部門に相談してみようと思つて歩きかけた。この一、二年で急速な広がりを見せている

美容ヘルス整体院の情報を得られないとも限らない。新しい店を開いた、という情報くらいは得られるかも知れない。

「所在が分からないのでしかとは掴めないが、回源水化粧品か、回源美容ヘルスとか、性感ヘルスカイゲンとか、どうだろう。こここのところの店舗の拡張具合で見ると、自然水美容ヘルスというのが目立つな」

元の祐介の席に座った旧知の同僚が、いったいどうしたのだという顔を見せる。

「だと、新宿がメインだな」

祐介は挨拶もそこそこに本社を飛び出した。「おい、みんないるんだ。飯でも一緒に食わないか」という声が追いかけてきたのを振り切つて外の人気のない公園まで走った。

祐介は「自然水美容ヘルス」の大代表に電話を入れた。コールの後、営業の内容や、料金体系などのかかなり詳細なテープが流れ、それを何度も繰り返す。塚が明かないので、最も近い店舗に足を運んでみることにした。

路地の奥まったところにある新装なったと見える店舗の自動ドアから入ると、観葉植物が幾つも置かれた待合室だった。観葉植物の影に入ると、他の客の姿はかなり遮られ、あたかも個室にいるかのような感覚である。室内には、爽やかな環境音楽が流れ、その場にいるだけで心に何かから囁きかけられる思いである。

どういうサービスが受けられるのかをフロントに聞いてみると、「顔の悩み(シミ、シワ、たるみ、輪郭形成、小顔形

成、ゆがみ矯正)」などから始まり、「健康管理(美容健康、慢性疲労、肩凝り、腰痛、体幹の歪み矯正)」などと実に細かく示されており、他にも「カイゲン水マツサージ」「カイゲンオイルマツサージ」「ヒーリング」「免疫力アップ」などと、多くのメニューがある。

客は男女を問わないということで、数人の時間待ちの顔ぶれを見ても、十代から六十代までぐらいの、身なりも様々な人がいる。

「リピーターの方が多いいですか」と聞くと、「新しい方は経験された方のお話を聞いてという方が多く、二、三日置きにご来店くださる方も多いいですよ」とやわらかな調子で教えてくれる。

「たいへん失礼ですが、最近暴力事件があったというお店はご存じありませんか」と尋ねると、「と申します」と一息置き、「私どもの知る範囲では聞き及びません。ヒーリングをメインとしておりますので、心身の癒やしをご提供することを専一にいたしております」と真顔で答えてくれる。

「もしや、花田理乃という関係の方はいらつしやらないでしょうか」

「私どもの職員で、ということでしょうか。なにしろ、数十の店舗を抱えておりますので、正確には新たに加わっていた方々の名前は漏らしてしまうかもしれません、こうしてオンラインで検索しましたが、当店には在籍していませんのと思われまます」

「『自然水美容ヘルス』というお店の名前は、特別な意味を

持つものでしょうか」

「都会の人間関係の中に、瑞々しい太古の自然水の恵みをもたらすことで、多くはストレスからくる疲れを癒やす、ということが私たちの第一の目的です。訓練されたセラピストそれぞれ、主に指先から発する太古のエネルギーが、お客様が持つておられる元々の活力を取り戻すお手伝いをし、寛ぎの世界に導く、という仕組みを実際に体感していただければ、と思います」

と、まだ二十代後半かと思える女性職員は、微笑みを絶やすことなく質問に答えてくれた。祐介は不躰な訪問を詫言、全身に切れ間なく降り注ぐ音楽の中を店舗の外に出た。

店舗の外にはいつか夕暮れが迫りつつあり、通りには人が溢れていた。

ふと、ポケットの携帯のコールが鳴った気がして雑踏の中に立ち止まり、三通着信したメールを開いた。会社から二通と、理乃からの着信が一通あった。

「心配かけたわ。代表者の身体に問題はなく、一週間ほど入院ということになりそう。知らない暴漢に太股を刺された模様だけれど、大きなダメージにはならないとのこと。警察の話では、背後関係はなく、暴漢は酔った上で、羽振りのよさそうな者なら誰でもよかった、との話をしているらしい。会社もなんとか落ち着いたので、安心を。私は仕事の傍ら、当分代表者を見舞うことになる予定。しかし、このことのお陰で、大阪のことや、マンションのことは、当分先のことにな

りそう。とり急ぎ連絡まで。理乃より」

という内容になっている。時間からすると、環境音楽の中にいたときのことである。祐介はその場でコールをしてみたが、理乃の携帯は以前のとおり電源が落とされている。祐介は、今自分だけが混乱しているのかもしれないと思った。これまで、祐介の方からコールすることはめったになかったし、理乃からも定時のメールか、急ぎのとき以外は連絡がきたことがない。このメールの内容も、理乃の中では上手に丸められたものかもしれない。つまり、慌てて駆け付けた祐介の方が非日常の中にいるのに、理乃は既に日常生活に戻っているということか、と考えた。

祐介の胸に、これまでに経験したことのない波が立ち始めるのを感じた。理乃が自然回流水に興味を持ち、会場に足繁く通い出し、整体院などに入りし始めたのは、祐介が理乃の肌が磨かれていくことを知りながら、であるからこそ、その事実を嫉みに似た気持で捉え、できるだけ目を逸らそうという思いにかられ、理乃を求める度合いが少なくなつた時期に重なる。もちろん、祐介の仕事が多忙を極めていたというためでもあるが、仕事を口実に、理乃の肌を間近に見ることを避けようという気持が確かにあった。

大学四年次のときの、理乃への負い目もあったし、今理乃が走り出した、太古の自然に限りなく近い姿で現れ出ようとしている水際への道程は、決して止めてはいけないのだという内なる声を、何か力あるものからの指示なのかもしれないとさえ感じていた。

「環境汚染の問題に直面しているこの病んだ時代である今、自分たちの知恵で健康を守り、家庭を守っていかねばならない。そうすることで、心と体のバランスを適正に保ち、与えられた美を維持し」というあの三十台半ばであるのだろう代表者が、舞台上に颯爽と登場し、穏やかな声で問いかけたことばが、祐介の胸の奥に今も残っている。破壊、汚染、除染、癒やしなどという気の遠くなりそうな問題を負わされている今、「浄水」という一点への方向付けをビジネスとして持ち出した、ということは否定されるべきではないだろう。もつとも、あの代表者は今本来の舞台を追われ、志とは異なった道程の途上にあるのかも知れない。その関連のことで、暴漢に傷付けられたといえなくもないのではないか。

疲れているのかもしれない、と祐介は思った。立ちつくしている今、ずしりと重い空気に纏われており、足の踏み出しようによつては、際限もない深みに落ちていくことになるのかも知れない、という恐れを感じる。

「私たちの身体をつくる細胞は、太古の自然のものと触れ合うことで癒やされるの。つまり、太古の素の姿に戻る、ということ。細胞の芯から清らかにする。ここが肝心なのよ」

「日常のたまらない生活から、離れてみることも大切ね」  
背にした店舗の一角から、理乃の鋭角の視線に射られているのではないかという故のない思いにも捕らわれながら、練馬のマンションをどうすべきかについては早めに判断し、本社に相談しなければならぬのだろうと考えた。

奔りだした水はいつ、どのように、どういう方向に流れを変えないとも限らない。「何というザマだ」祐介の胸に、自嘲とも自爆へ向かうとも分らない怒りが燃え上がった。

交差点を渡り、街並を抜け、坂道を上り、路地を縫い、幾つもの交差点を渡った。知らないうちに、かつての学生街の方へ向かっているのに気付いた。念のため、二、三度コールをしてみたが、理乃の携帯の電源は落とされままである。

祐介は乱れた呼吸を懸命に整え、「ともかく今は、福岡に戻れないのだ」と思い直した。地下に下りると、真っ直ぐには歩けないほどに溢れた人の群を乱暴に掻き分け、長いエスカレーターを乗り換え、羽田への乗り場に向かった。

由紀には「今夜戻ります。当方、異状はありません」とのメールを入れ、搭乗した。最終の一つ前の便のチケットしか手に入らなかった。後部座席シートから外を見やると、ターミナルが鮮やかな光に照らされているのに比べ、滑走路の大部分は闇に包まれていた。

窓のガラスに、由紀の落ち着いたいつもの表情が浮かんできたが、機体が動きだすにつれ、窓を光が過ぎり、由紀の姿は揺らいで消えた。瞬間軽い目眩を感じ、目を閉じた。

機体はゆるゆると進み、滑走路手前でしばらく停止していたが、「当機はまもなく離陸いたします」との乗務員のアナウンスが流れると、エンジンをフルにし、やがて猛然と闇に向かつて走り始めた。

(了)